

「大立山まつり」について(上)

「なら」民俗通信

鹿谷 勲

□ 249 □

文 化

ならまつりの一環として行われた「大あんどんパレード」は、各商店街がそれぞれ工夫して「仁王」「龍」などの大あんどんを台車に乗せて、夏の三条通を運行したものでした。

知事は当初の発表で「全国の祭りでも最も集客力があるのが青森ねぶたらしい」と言い、そのため「奈良県が青森のマネをして偽ねぶたで集客を狙っている」という評価が立ちました。

その後、幾人かの知人に意見を聞いてみた。いずれも厳寒の夜の「冬期誘客イベント」に違和感を抱いたようだったが、そのうちの一人S氏は後日、詳しい所感を送ってくれた。地元市民として各種の活動を行っている人のもっともな見解で、文章だけならという条件で承諾を得たので、「なら民俗通信」に掲載させていただくことにした。

昭和60(1985)年から奈良市商振会による「ほん張子(はりこ)に灯あか」をつけて引く祭りは、かつて奈良でもありました。昭和60(1985)年から大あんどんまつりの参加募集では、若草山焼き・お

「熱い思い」の共有が鍵

水取り・万灯籠など「火」に関わる行事が奈良に多くあること、人々の願いと思いを灯りに託して歴史と聖なる世界に届けるために送り出される市民の火が大あんどんであり、市民参加の祭りであることが強調されました。その制作に当たっては、ねぶたの製作法を学ぶため、青森へ見学に行った者もいました。

■2 祭りの目的は人に見せる事ではない
大立山まつりに対して人々が持った「違和感」は、県主導による「集客のため的人為的な祭り」と見えたためでしょう。「閑散期の宿泊客確保のため」と語り、「冬季誘客イベント」というタイトルで実行委員会が見せる事ではない

■3 祭りは見るよりやる方がずっと楽しい
とはいえ今回の大立山まつり、2度現地を見ましたが、会場内に遠方からの観光客はわずか、県内各地から芸能を披露に来た方々と近隣の奈良市民が多数だったようです。寒さの中で一番元気で楽しそうだったのは、大立山

作られたのですから、当然の反応です。多額の県予算を使う以上、その経済効果を抜きに語れませんが、それが前面に出すきたのではないのでしょうか。
春日若宮おん祭りも、種々の芸能や風流、舞楽雅楽など見どころが多数ありますが、それは本来「神様を喜ばせるため」であり、見物客に見せたり写真を撮らせたりするために行われているわけはありません。その点を「観光客に見せるため」と勝手に誤解し、正しく行動している奉仕者に「写真の邪魔だからどけ」

と命じるようなアマチュアカメラマンが頻繁に登場して、響聲(ひんしゆく)を買っています。
「大立山まつり」のように「観光客を増やす」という目的を県が前面に打ち出してしまつと、「祭りは神様に見せるため」という矜持(きょうじ)を保つことも難しくなります。
■4 願ひ思いがあるか
知事が一番人気という青森ねぶたですが、東北の夏の祭りがなぜ魅力的か、そこに夏の日照に対する切実な願ひがこめられているからでしょう。「寒さの夏」「飢饉(ききん)」です。春日若宮おん祭りは、興福寺衆徒の祭祀(し)「権奪

取の面もありますが、創始の保延2(1136)年は長雨洪水が続き、雨留めを願ひ天押雲根命(あめのおしくもねのみこと)の祭礼を秋に行ひ、見事天候回復したといひます。

大あんどんまつりは、大型店攻勢の前に地元業者・市民が力を合わせて21世紀を迎えるようにしたいという、これも「熱い思い」があったからこそ真夏に手弁当で動き、盛り上がるこ

その意味で大立山まつりで県庁職員有志が一番盛り上がったのは、やはり冬の閑散期の集客を平城宮跡で実現し、大型ホテル誘致の計画をなんとか成功させたいという「熱い思い」があったからではないでしょうか。
山車の装飾「朱夏・白秋」が「白熱・錦秋」になつていったというチョンボもありますが、同時に展示されていた広陵町の「立山」を原型としているのは強弁に過ぎるでしょう。むしろ「ねぶたのような県民多数が盛り上がる祭りを作りたい」と正直に語る方が、県民の共感を呼んだのではないのでしょうか。県民の共感が吸引力となつて、県外の人も訪れたくなるのでしょう。

「熱い思い」をどれだけ県民市民に共有してもらえるか、そこに今後のこのまつりの存亡が懸かっていると思ひます。



「奈良大立山まつり」、2016年2月1日終了後の状況

奈良県が「主催」した大立山まつりは、初日が酷(ひど)い天候ではありましたが、無事に終了したようです。青森の「ねぶた」のマネじゃないかと言う批判が、あまり県政の批判を行わないメディアからも出ていることは、注目されるべきかと思ひました。

■1 偽ねぶた批判はあったのか